

第 5 4 回臨床検査技師国家試験を検証する

大堀晶子¹⁾ 望月泰男¹⁾ 大西英文¹⁾ 石田洋一²⁾
(¹⁾昭和医療技術専門学校 ²⁾京都保健衛生専門学校)

Key words : 国家試験の傾向、教育の在り方、基準値の表記

【はじめに】近年の国家試験は、出題基準に準拠した試験問題が出題され、内容も精査されている。単に記憶だけを問う問題ではなく、患者データを読み取る能力や実際の実技を習得していないと正答が得られない良問が多く出題されている。それらの問題に対応するには、基準値の記憶範囲、実習・演習教育のシラバスでの行動目標(SBOs)を検討する必要がある。そこで、今回の国家試験について、基準値、技術内容並びにタキソノミー型を抽出し、本校の教育の在り方を検証した。

【対象及び方法】対象は、第 54 回国家試験問題並び厚生労働省発表による正答、平成 19 年度本校卒業生 80 名の自己採点結果と解答分布、京都保健衛生専門学校における国家試験正答率調査(20 校)を対象とする。では全出題内容から基準値の知識を求める設問(午前 14・15・17・20・67、午後 12・16・20・31・34・43・61・66)、検査法の手技の理解力を求める設問(午前 18・28・51・52・54・84・85・86、午後 10・17・21・51・56)、タキソノミー型の設問(午前 7・14・15・20・67・72、午後 12・34・78、午後 50)を抽出する。では自校の正答率と解答分布をの正答率と比較する。それらの結果から、基準値の記憶を必要とする検査項目並び教育手法の在り方を検討する。

【結果及び考察】上記 A 基準値の知識を求める本校の平均正答率は 70.7% (他校 68.7%)であった。B 検査法の手技の理解を求める平均正答率は 73.4% (他校 75.5%)であった。又、C タキソノミー型の平均正答率は

69.1% (他校 65.6%)であった。その中で、本校の低正答率 50%以下の設問は、A 午前 14・20 の 2 題、B 午後 10 の 1 題、C 午前 7・14・20 の 3 題であった。解答分布と要因を調べると、A と C の 14 では、設問の基準値は明らかに低値であることは理解していたが、検査値の変動と疾患の結びつきが明確でなかった。A と C の 20 は、肺活量・1 秒率の基準値は記憶した上での閉塞性換気障害を推測させる問いである。機能的残気量・残気量が増大することを習得していたが、予備吸気量・1 回換気量・予備呼気量の増減について理解不足であった。B の 10 では、ギムザ液についての表現(使用時調製、速やかに染色)の受け止め方に問題があった。C の 7 では、赤血球円柱を認め、腎炎を想定し、小児に多い感昌様の症状・浮腫・高血圧があり、溶連菌による急性糸球体腎炎へ結びつけなければならない。しかし、学生は赤血球円柱の判読ができず、浮腫・高血圧の言葉のみで解答していた。

【まとめ】今回の国家試験は、特に臨床的な検査データの捉え方を求める出題や実際の実験手技の中身を問う問題が増加している。そのため本校の教育の在り方について、検査結果を横断的に学べる科目や実習の中身を一部見直す必要がある。また医師国家試験出題基準では検査項目の基準値表記について取り決められている。それに対し、検査の専門家である臨床検査技師の国家試験出題基準には示されていないのが現状である。今後、出題基準の見直しにおいて組み入れる必要がある。